博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）川口健一 ㊞

【審査結果】

本論文は、20 世紀のイランを代表する詩人アフマド・シャームルー（1925-2000）の「非韻律詩」she ʻr-e mansūr 創出をめぐる詩学とそのシャームルー詩のリズム分析に焦点を当てて、考察したものである。

審査委員会は論文審査と最終試験（公開審査）を行った結果、全員一致して博士（学術）の学位を授与するのにふさわしい研究であるとの結論に達した。

審査委員会は、川口健一教授（主査）、谷川道子教授、柴田勝二教授、藤井守男教授、上岡弘二本学名誉教授の 5 名の委員で構成された。

【論文の概要および構成】

本論文は序論と本論 4 章および結論から成っている。

序論では、近現代ペルシャ詩の文学史的状況と先行研究を踏まえ、she ʻr-e mansūr（「散文の詩」）が自由詩と散文詩の同時発生的ジャンルであるとして、それに前田氏は「非韻律詩」の訳語を提起する。

第 1 章「シャームルーの非韻律詩 she ʻr-e mansūr の位置づけ」では、シャームルー以前の「非韻律詩」she ʻr-e mansūr の試みを概観し、シャームルーの非韻律詩を文学史のなかに位置づけることを試みている。まずは 1920 年代に出現し、必ずしも統一的な系譜や方向性をもたなかった非韻律詩が、ニーマー自由韻律詩の登場によりこの詩形式から脱しようする明確な方向性を得たことを指摘する。そして、1940～50 年代において非韻律詩の試みを行ったシェイバーニーやシャームルーが非韻律詩を必然的な形式として捉えた点において、彼らの試みを、「脱・ニーマー自由韻律」として方向づけられた「非韻律ジャンル」創成の潮流と位置づける。さらに、初期においてニーマー自由韻律詩を奉じたシャームルーが、第 2 詩集『決議』の出版を契機に師ニーマーと決裂したことから、この詩集に見られる詩の技法を、シャームルーの「脱・ニーマー」という観点から考察する。

第 2 章「シャームルーの非韻律詩の詩学」では、韻律を排除した詩の成立に関わるシャームルーの詩学を明らかにしようとする。まず、ニーマーとシャームルーの対立を二人の書簡やインタビュー資料により考察する。詩のフォルム

を、詩の「内容」に対する「容れ物」として捉えるニーマーに対し、シャームルーはフォルムを詩そのものと一体であると見なす点において、ニーマー詩学とシャームルー詩学の決定的な相違を見ることができると前田氏は指摘する。また、シャームルーの詩論をもとに、非韻律詩が詩人の無意識を介在として「生まれてくる」という個人的な体験の産物であったことを明らかにする。シャームルーの言う無意識性とは、詩人の内部と外界との関連を否定するものではなく、それらのつながりの仕組みに対する無意識なのであると捉える。さらに、シャームルーが確立しようとした「純粋詩」の思想についての考察を行う。シャームルーにとって「純粋詩」の概念とは、韻律を失った言葉（「散文の詩」）が詩であるための「詩性」の根源を希求した理想詩であったと述べられている。

第 3 章「シャームルー詩の音楽」では、先行研究における非韻律詩の「音楽」mūsīqī（リズム）の概念を再検討し、音韻反復、古典語文体、詩行の視覚配置という 3 つのリズムを新たに位置づけ直す。パーシャーイーがシャームルー詩の詩行の視覚的構成を詩における音楽の発現として捉え、「音楽的構成」なる概念を与えたのに対し、前田氏は「知覚されるリズム」の概念を提起し、一般的な詩学研究の成果に基づいて、自由詩におけるリズムが視覚的詩行配置、等価構造などの要因によっても創りだされるものであることを示す。

第 4 章「シャームルー詩の構成のリズム」では、シャームルーの詩が作品の部分的な効果を優先させる形で成立していること、また、構造に基づいた展開を見せることを、「内なる寒さ」、「お前のおじさんたちのこと」、「青の歌」の 3 作品に基づいて、具体的に分析する。この分析を通して、シャームルーの作品が詩連を単位とする等価構造を基本とし、そのなかに対比や対照、回帰的構造を創りだすことによって、あるいは文法的関係性を利用することによって、非韻律詩のリズムそのものを成立させていることを解き明かす。

結論として、以上の議論をまとめ、シャームルーは非韻律詩によって韻律リズムからの解放を成し遂げ、さらに、さまざまなレベルに基づく知覚的なリズムと、これに依拠した作品の構造的な展開を通して、感覚的で卓越した現代性をもつ詩の世界を創りだしていると結論づけている。

【論文の評価】

まず、論文中で言及されるシャームルー以外の重要な詩人については、本論文の理解を助けるためにも最低限必要な説明はしてほしかったとの要望が何人

かの委員から出された。例えば、シャームルー詩の個性を明らかにするべく対照されているのは「ニーマー詩」であるが、イランの詩の歴史を知らない委員にとっては「ニーマー詩」の位置づけがわかりにくく、シャームルーの個性を明確にするためにも、まずニーマーについて（前田氏の修士論文のテーマでもあったことにさえ本文中では言及されていない！）ある程度の紹介と位置づけをしていただきたかった、などの要望があった。また、本論文に例として取り上げられている詩がやや少なく、例証力が弱いのではないかとの指摘もなされた。論文の技術的な点については、表記の間違いの訂正とともに、詩の翻訳に関しても、不正確・不適切な箇所の指摘があり、再検討が求められた。

先行研究に対する筆者の対応については、委員から次のようなやや厳しい評価がなされた。ペルシャ詩はイラン国内でも最も充実した研究分野の一つであり、古典詩研究を土台にして現代詩の言及に至るペルシャ詩研究を渉猟し、イラン国内のペルシャ詩に関する研究動向の精緻な跡付けをするだけでも相当の知的労力を必要とするはずである。本論文では、特に、『詩の音楽』（シャフィーイー＝ィェ＝キャドキャニー）といったペルシャ詩の音楽性の研究や、優れた研究者によるシャームルー研究書に対する筆者の対応は単に、シャームルー詩の視覚的側面に注目していない、あるいは、より自由に解釈を展開するべきだ、という程度の見識を土台とするものとなっている。一方で、特に『詩の音楽』というペルシャ語の研究書には、本論文執筆者の説くところを先取りしていると思われる箇所もあり、また、単に、シャームルー関連の箇所に留まらず、ペルシャ詩のリズムを考察する上でも有益な情報が提供されていると思われる。こうした先行研究の検証過程を経て、シャームルーが真の意味でペルシャ古典詩から影響を受けていなかったかどうか、という点も闡明されるはずであるし、また、ペルシャ詩における韻律の変化の細部に関する具体的な議論にも入り込めたかと思われる。

さらにこのことに関連する問題点として、シャームルー詩の研究にあたって、一人の詩人の仕事を、その詩人の暮らす社会との関係を断ち切って論じることが果たして可能であろうか、という点が指摘された。前田氏は、政治史のなかで論じられることが多いシャームルーという詩人を「政治」から解放して、純然たる文学論の対象として議論する方法を探求し、その結果、詩を詩として成立させているもの、すなわち、「リズム」の解析に帰着したと反論した。であるならば、詩を詩として論じることの妥当性に関する、説得性ある議論をまず

設定すべきではなかっただろうか。本論文を読み進めれば進めるほど、トルコの共産主義系の反体制詩人ナズム・ヒクマト（1902-63）の詩による覚醒、トゥーデ党（イランの代表的共産党）員モルタザー・ケイヴァーンへの傾倒などに、むしろ、シャームルーにおける詩的闘争と現代イランの社会闘争や政治運動との関係の縮図が見えてくるように思われるからだ。純然たる文学論として議論を展開するためにも、シャームルー詩の政治と断絶させた評価を説くためにも、現代イランの政治と詩人という点に逆に深く触れるべきであったのではないか、いう委員側の指摘である。

委員から出された要望としてもう 1 点付け加えておきたい。前田氏のシャームルー研究視点の相対化に関してで、例えば、音楽性・リズム構造についてならイランの別の詩人との比較の試みも行ってほしかったし、またシャームルーが「出会った」外国の詩人や思想家、さらにわが国の文学者を視野に入れた論究も試みられたなら、より受け入れやすい論考になったのではないか、という点である。

本論文は以上のような要望、論述の不十分な箇所・方法上の問題点の指摘がなされたものの、論文全体としては以下のような積極的な評価が与えられた。

本論文は複雑を極める現代イランを代表し、象徴する詩人を論究の対象に据えており、イランという独自の政治・文化風土を理解する上でも極めて興味深い対象といえる。論文全体を通じて、イラン文化の精髄を形成するペルシャ詩の現代的可能性を見据えようとする先鋭的な学問的問題意識がうかがわれる一方、難解で知られるシャームルー詩を可能な限り入手できる情報を活用して解読し、日本語に訳出している点から、語学力を含め、論文をとりまとめるのに充分な学力と文章表現力が備わっていることも理解される。研究分野から見て、本学であればこそ育成された研究として、高い独自性があるといえる。

前田氏は、前述したように、修士論文でペルシャ詩の韻律改革をすすめた詩人ニーマー・ユーシジに関する研究に着手して以来、イラン現代詩のなかでも特に、アフマド・シャームルーに関して集中的に研究を継続してきた。本論文は、そうした年来の研究の蓄積を土台に、その過程で割り出された研究主題であるシャームルー詩のリズムの創出のメカニズムに関する実証的研究として、課程博士論文の水準を十分に満たしていると判断できる。

この論文をもって、わが国で初めて、イランの近現代詩の、日本人独自の本

格的な研究がその姿を現してきたわけであり、今後の研究の発展に大きな期待がもてる。

以上のような判断から審査委員会は全員一致して、最初に述べた結論に達した次第である。